

福留 正治

「あれこれ前兆現象を考える」



「ハインリッヒの法則」というのがあります。安全活動などでよく用いられる原理原則です。『一つの重大災害が発生する背景には数多くのヒヤリハットや小さな事故災害が多発しているはずだ。ある日突如として重大災害が起きるわけではない。小さな事故が数多く発生して大事故に繋がるのだ。小さな事故災害の時にその都度対策を講じておけば重大災害は起こらない』というものです。普段、私たちは取るに足らない小さな現象となると関心も示さないし、安易に見逃してしまいます。

環境問題についても正にこの法則が当てはまります。小さな前兆現象に気づかず、何の対策も講

ずることなく物質的豊かさばかりを追い求めると人類存亡に係る重大現象が起こることになるという法則です。先人達は昔から人間の為せる業が「環境破壊の前兆」であることに気づいていました。1800年代の中ごろ、日本に於ける生物分布の境界を明示したブラキストンの伝記(豊田有恒著)に次のような著述があります。『スペインのセパルベータが唱えてからヨーロッパには「ノーブル・バーバリアン(高貴なる野蛮人)」という概念が広まっている。いわゆる文明人が外見上は豊かな生活をエンジョイしているように見えても、金、欲、地位、名誉などに煩わされ、実際には惨めであるという考え方である。その点いわゆる野蛮人と言われている人々は自然のままに生きて、家族を大事にし、自然を敬い、いわゆる文明人よりはるかにモラルの高い生き方をしている』アイヌ民族と出遭った英国軍人のブラキストンは日本の支配階級と被支配者の社会構造を目の当りにして感じたようです。

折しも今、国連生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が名古屋で開催されています。多様な生物を、その生息する環境とともに守っていくことが出来るか否かがCOP10では問われているのだと思います。

「枯れ木に百舌鳥が止まっているのを見なくなった」「あの池に毎年来ていたバンが来なくなった」「田植え時にうるさいほど鳴いていたカエルが鳴かなくなった」「ミンミン蝉の鳴く声が聴けなくなった」など等、ついこの前まで身近に居た生きものが居なくなるのはなんとも不気味です。大げさかも知れませんが不吉な前兆のような気がしてなりません。

前兆を感じる感受性と行動力は弛まぬ学習によって培われます。環境を壊したのも人の力なら修復出来るのも人の力です。環境問題に立ち向かうのには“人づくり”こそが焦眉の急と思われれます。

福留 正治 氏

1937年生まれ。
元川崎製鉄(株)、川鉄鋳業(株)勤務。
環境カウンセラー。
(特)岡山環境カウンセラー協会顧問。
エコアクション2.1審査人。
(財)おかやま環境ネットワーク評議員。